



## JSPSボン研究連絡センター 2011年度第3四半期活動報告 (2011年10月～12月)

### < 目次 >

1 2011年10～12月の主な活動	…p 1
(1) 日本の大学及び渡日プログラムの紹介イベント“Forschung und Studium in Japan“を開催	
(2) 3大学での「日本週間」関連行事に参加	
(3) 日独ラウンドテーブル“From the early universe to the evolution of life”を開催	
(4) ボン大学生命医科学研究所(LIMES)と早稲田大学との共同シンポジウムに出席	
(5) 大阪大学、神戸大学主催「日欧協働シンポジウム-教育・研究・交流:ブリュッセル 2011」に出席	
(6) ボン大学での早稲田大学主催日本への留学フェアに参加	
2 2012年1月以降の予定	…p 15
3 対応機関幹部の交代	…p 16
4 センター長雑感	…p 16

### 1 2011年10～12月の主な活動

#### (1) 日本の大学及び渡日プログラムの紹介イベント“Forschung und Studium in Japan“を開催

日時: 10月21日 9:00-12:30

場所: ゼンケンベルク博物館(フランクフルト市)

当センターにおける秋の恒例行事となっている日本の大学及び渡日プログラム紹介イベント“Forschung und Studium in Japan“(日本での研究と学修)を、フランクフルト大学の隣に立地するゼンケンベルク博物館で開催した。これはJSPSが我が国の大学の国際化を支援する事業の一環として、欧州に拠点を置く大学等関係機関に参加を呼びかけて行ってきたものであるが、今回は会の冒頭に日本の研究政策、研究拠点に関する説明及び、日本の留学生政策及び留学生を対象とした奨学金の説明の時間を用意し、次のとおりのプログラム構成とした。

- ・開会挨拶 フランクフルト大学副学長 マティアス・ルッツ-バッハマン教授
- ・日本の研究拠点概要 在ドイツ日本国大使館 大土井智 一等書記官
- ・日本の留学生政策 在ドイツ日本国大使館 増子則義 一等書記官

- ・フェローシップを中心とした JSPS 事業説明 JSPS ボンセンター 中川正志 副センター長
- ・グローバル 30 及び早稲田大学 早稲田大学ヨーロッパセンター アンネマリー・シュプリングマン  
リージョナル・マネージャー
- ・大阪大学 同大グローニンゲン教育研究センター長 弘津禎彦 特任教授
- ・筑波大学 同大ヨーロッパ事務所長 相澤啓一 教授
- ・名古屋大学 同大ヨーロッパセンター フォンリュブケ留奈子 特任講師
- ・東京農工大学 JSPS ボンセンター 坂本真梨子 国際協力員
- ・国際交流基金ケルン日本文化会館 トーマス・ゴルク職員  
(コーヒーブレイク)
- ・JSPS 元フェローによる体験発表(2名)
- ・JSPS ドイツ同窓会
- ・閉会挨拶 JSPS ボンセンター 小平桂一 センター長

当日は、フランクフルト大学の学生、教職員を中心に、80名程度の来場があった。同大関係者によると、3分の1程度は日本学部の学生と思われるとのことであった。参加者は熱心にメモを取ったりしながら説明を聞いていた。当センターも情報ブースを用意したが、ブースを訪れた参加者からは、必要な情報が良く整理されて伝えられているなど、本イベントに対して多くの肯定的な意見が寄せられた。この情報イベントを広く周知し、多くの方に来場してもらうために、フランクフルト大学、ゼンケンベルク博物館、JSPS ドイツ同窓会、フンボルト財団、フランクフルト独日協会等の多くの関係者にご協力いただいた。



司会進行をする小平センター長



開会の挨拶をするフランクフルト大学 ルッツ-バッハマ副学長



日本の研究拠点概要について講演する大土井一等書記官



日本の留学生政策、奨学金について講演する増子一等書記官



JSPS 事業紹介をする中川副センター長



東京農工大学の説明をする坂本国際協力員



会場の様子



コーヒーブレイク中の情報ブースの様子

当日は、上記広報イベントに引き続き、午後からはJSPSドイツ同窓会行事“Mitglieder laden Mitglieder ein“(会員による会員の招待)が開催され、当センターから小平センター長、中川副センター長、シュルツェ職員、アルバース職員、坂本国際協力員が参加した。「会員による会員の招待」は、同窓会がほぼ毎年1回開催している恒例行事で、ある同窓会員がホスト役となり、他の全同窓会員をホスト役の所属機関等へ招待するという形式で開催されている。行事の目的は、同窓会員間等のネットワーク強化、新会員獲得等で、例年学術講演を中心としたシンポジウムで始まり、親睦食事会、エクスカージョンが行われている。

今回の「会員による会員の招待」は、フランクフルト在住の同窓会員2名がホストになり、ゼンケンベルク博物館内の午前の広報イベントと同じ会場で開催され、70名程度の同窓会員が参加した。会の冒頭では、在フランクフルト日本国総領事館 重枝豊英総領事及びフランクフルト大学 マンフレッド・シューベルト-ツシラヴェクツ(Prof. Dr. Manfred Schubert-Zsilavec) 副学長にも挨拶をいただいた。

挨拶に続き、日本との共同研究等をテーマとした6つの学術講演が行われた。その後、ゼンケンベルク博物館見学、親睦夕食会が行われ、翌22日はフランクフルト市内のエクスカーションが行われた。



「会員による会員の招待」会場の様子



参加者集合写真

### (2) 3 大学での「日本週間」関連行事に参加

2011年度第1四半期(4～6月)活動報告で報告したとおり、2011年4月から12月にかけて、ドイツの18の大学で「日本週間」が開催されている。「日本週間」は日本の大学との協力関係を深めたり、日本への留学や研究滞在を促進する大学のプロジェクトを支援するもので、2010年秋に公募が行われ、18の大学が採択された(内7校がJSPSボン研究連絡センターの所在するノルトライン・ヴェストファーレン州内の大学)。「日本週間」は連邦教育研究省(BMBF)が日独交流150周年記念年に合わせて予算を用意し、ドイツ大学長会議(HRK)が運営している。

HRK HP [http://www.hrk.de/de/hrk\\_international/hrk\\_international\\_5744.php](http://www.hrk.de/de/hrk_international/hrk_international_5744.php)

当センター2011年度第1四半期(4～6月)活動報告

[http://www.jsps-bonn.de/fileadmin/bonbon\\_dokei/BonBonDokei32katsu.pdf](http://www.jsps-bonn.de/fileadmin/bonbon_dokei/BonBonDokei32katsu.pdf)

当センターでは4月から6月に8大学の、11月に3大学の日本週間に参加した。以下、11月に参加したものについて報告する。

#### ① ゲッティンゲン大学(11月2日-4日)

ゲッティンゲン大学の「日本週間」では11月4日に“Forschen in Japan“(日本での研究)というセッションが設けられ、これに中川副センター長が参加した。同大教員や学生による現在進行している同大と日本との共同研究の紹介及びドイツ研究振興協会(DFG)からの講演に続いて、中川副センター長がフェ

ローシップを中心とするJSPS 事業紹介講演を行った。会場には20名程度の来場者があり、内5名前後が日本人の若手研究者や学生であった。

JSPS 以外の発表後の質疑応答では質問が少なかったが、日本へのフェローシップといった渡日に関する具体的な説明はJSPSの講演だけであったためか、JSPS 事業紹介後は質問が相次ぎ、20分程度質疑応答が続いた。質疑応答終了後も中川のところに4、5名の方が集まり質問し、来場者数は多くなかったものの、関心は非常に高かった。



中川副センター長による JSPS 事業紹介



会場内の様子



博士課程学生による東北大学との共同研究紹介



学生食堂前に設置された資料コーナー

< 関連 URL >

ゲッティンゲン大学 HP <http://www.uni-goettingen.de/de/303917.html> (ドイツ語)

## ②ミュンスター大学(11月7日-11日)

ミュンスター大学の「日本週間」への参加は、4月にハンブルク大学で「日本週間」オープニングシンポジウムが開催され、当センターから中川副センター長とアルバース職員が参加したが、その場でミュンスター大学国際部の方と知り合い、JSPS 事業紹介を依頼されたものである。

同大の「日本週間」は7月に開催される予定であったが、大学側が東日本大震災の影響を考慮し、11月に延期していた。11月8日に“Connect Japan - Partners and project funding“というセッションが設けられ、JSPSの他にドイツ大学長会議(HRK)、ドイツ研究振興協会(DFG)、日本から独協学園、名古

屋大学、国際基督教大学が参加し、それぞれの事業や大学の紹介を行った。当センターからは中川副センター長とシュルツェ職員が参加し、中川が JSPS 事業紹介を行った。来場者数は 30 名程度であった。



中川副センター長による JSPS 事業紹介



会場内の様子

< 関連 URL >

ミュンスター大学 HP <http://www.uni-muenster.de/Japan-Woche/> (ドイツ語)

### ③ボーフム大学(11月21日-25日)

ボーフム大学での「日本週間」は5月に開催される予定であったが、大学側が東日本大震災の影響を考慮し、11月に延期していた。当センターからは、11月23日の“Japan Info Day“にシュルツェ職員、坂本国際協力員の2名が参加し、情報ブース出展と来場者に対する事業紹介を行った。

会場にはドイツ学術交流会(DAAD)やアレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)、国際交流基金等のブースも設置されていた。



JSPS のブース(左はシュルツェ職員)

< 関連 URL >

ボーフム大学 HP <http://international.ruhr-uni-bochum.de/japan/index.html.en> (英語)

### ④「日本週間」への参加を通して

「日本週間」では当センターだけでなく、日本の大学や関係機関が積極的な広報活動を行っていた。2011年は「日本週間」により集中的に広報活動を行うことができたが、これを通して今後日本への留学や研究滞在に関する関心が高まり、ドイツから日本への留学数や研究滞在数が実際に増えることを期待したい。

また、当センターの四半期報告書には、JSPSの活動として参加した日本への留学、研究滞在を促進するための広報イベントを中心に記載しているが、各大学の「日本週間」期間中にはそのような広報イベントだけではなく、日本語教室、日本の映画紹介、日本料理試食会、折り紙教室、武道や音楽のパフォーマンスといった、日本への関心を高めようとするイベントを各大学が趣向を凝らして開催していたことも合わせて報告したい。ドイツ連邦政府の予算支援によりドイツの大学でそのような行事が行われていたことは日本人としては非常に嬉しいことであった。

### (3) 日独ラウンドテーブル“From the early universe to the evolution of life”を開催

日時: 12月1日～12月3日

場所: ハイデルベルク大学、ヴァイラ・ボッシュ(ハイデルベルク市)

当センターでは毎年冬に、若手研究者を主な参加者として少人数で研究発表と集中的な討論を行う日独学術コロキウムを開催している。2011年は日独交流150周年の記念年でもあることから、当センターではテーマを基礎自然科学全般とし、例年のコロキウムの枠を拡大してラウンドテーブル形式で開催する計画を立て、日本側は大学共同利用機関法人自然科学研究機構(NINS)、ドイツ側はハイデルベルク大学及びマックスプランク天文研究所にそれぞれ経費的支援を含む共催について小平センター長より相談したところ、趣旨に賛同が得られ、4者共催により開催したものである。例年のコロキウムの参加者数は、日独それぞれ10名前後であるが、本ラウンドテーブルは講演者38名(内日本側18名、ドイツ側20名)、ポスター発表者23名(内日本側12名、ドイツ側11名)の参加となる大きな研究者集会となった。また、2011年はハイデルベルク大学の設立625周年記念年にも当たり、共催者である同大としては625周年記念行事の一環としての開催となった。

本ラウンドテーブルは、12月1日から12月3日にかけて、おおまかに次のような流れで開催された。

第1日目(12月1日) エクスカーション(マックスプランク天文研究所、ヨーロッパ分子生物学研究所(EMBL)訪問)

開会式典、基調講演、引き続き開会レセプション

第2日目(12月2日) 第1セッション“The Earth in the Universe“

Short Talks(ポスター発表者による持ち時間5分ずつのプレゼンテーション)

第2セッション“Atomic and Molecular Evolution“

第3日目(12月3日) 引き続き第2セッション

Short Talks

第3セッション“The Evolution of Life and Intelligence“

第4セッション“Science, Technology and Civilization“

“Discussion for the Future“

### ①第1日目(12月1日)

第1日目前半は、日本からの参加者を対象に、ハイデルベルク旧市街を見下ろす丘の上に在るマックスプランク天文研究所とヨーロッパ分子生物学研究所(EMBL)の訪問見学会が行われた。マックスプランク天文研究所では、2011年秋に完成したばかりの、児童生徒を含む一般を対象とした教育目的施設「天文の家」(“Haus der Astronomie“ 英語版 URL:<http://www.haus-der-astronomie.de/en/>)を見学することができたが、特にプラネタリウムは迫力のあるものであった。



「天文の家」



「天文の家」内部での説明

15時からは、ハイデルベルク大学の由緒ある旧講堂にて開会式典が開催された。式典はヴァイオリン演奏に始まり、ハイデルベルク大学 ベルンハルト・アイテル(Bernhard Eitel)学長及びドイツ研究振興協会(DFG) エリザベート・クヌスト(Elisabeth Knust)副会長から歓迎挨拶が行われたのち、自然科学研究機構 佐藤勝彦機構長の宇宙論に始まり、EMBL マティアス・ヘンツェ(Matthias Hentze)副所長と京都大学 中辻憲夫教授による生命科学論、ハイデルベルク大学 クラウス・タナー(Klaus Tanner)教授による自然科学と倫理学、東洋英和女学院大学 村上陽一郎学長による科学社会論に終わる5つの基調講演が続いた。創立625周年を迎えた伝統あるハイデルベルク大学旧講堂での基調講演会は、日独の参加者が学問の大きな流れに想いを馳せる良い契機となった印象を受けた。



ヴァイオリン演奏



ハイデルベルク大学 アイテル学長による歓迎挨拶





自然科学研究機構 佐藤機構長による基調講演



京都大学 中辻教授による基調講演



東洋英和女学院大学 村上学長による基調講演



会場内の様子



会場内の様子



集合写真

## ②第2日目(12月2日)

2日目から具体的な学術セッションに入り、第1セッション“The Earth in the Universe“では、宇宙での初期天体形成から惑星系の形成、太陽系外惑星における生命存在条件の研究状況など、天体物理学、宇宙化学、宇宙生物学の講演があり、活発な質疑応答が続いた。最近急速に進展した系外惑星探査の結果は、第二の地球発見も間近いことを予感させた。

ポスター発表者のポスターはコーヒーブレイクと昼食の会場になっていたホールに掲示され、休憩中に発表者はポスターの説明を行っていたが、各自5分ずつ会議場内でのプレゼンテーションの時間も与えられ、第1セッション後には、日独12名の若手研究者による“Short Talks“が行われた。

2日目午後から3日目午前にかけての第2セッション“Atomic and Molecular Evolution“では、物理・化学分野における最先端の研究成果が紹介され、日本のレーザー技術を使った原子時計、分子計算機のイノベーション可能性が注目を集めた。



会場内の様子(講演者は国立天文台 家教授)



(左分子科学研究所大森教授、右ハイデルベルク大学田中教授)



ポスター発表者による“Short Talk“



ホールでのポスター発表

2日目の夕食会では、在ドイツ日本国大使館の岡田憲次公使から日独交流150周年に当たっての歴史的背景紹介を含む日独協働への期待を込めた挨拶に始まり、会の中盤でエックアート・ヴェルツナー(Eckart Wuerzner)ハイデルベルク市長からの歓迎挨拶をいただいた後、国立天文台 観山正見台長による「仏教と自然科学」と題した示唆に富んだディナートークがあり、夕食会に深みを与えた。



夕食会での岡田公使による挨拶



観山台長によるディナートーク「仏教と自然科学」

### ③第3日目(12月3日)

3日目には第2セッションが引き続き行われ、その後日独11名の若手研究者による“Short Talks“が行われた。続いての第3セッション“The Evolution of Life and Intelligence“では、基礎分子生物学の急速な発展に伴い、医学・薬学分野で工業化の波が押し寄せて来ていて、社会倫理的な側面が重要性を増している現状を認識させられた。

最後の第4セッション“Science, Technology and Civilization“では、人類社会のエネルギー問題が提示され、核融合反応炉の将来性が論じられた。すべてのセッション終了後に、未来に向けての議論が行われた。

なお、2日目、3日目の会場ヴァイラ・ボッシュの所有者は実業家のクラウス・チラ(Klaus Tschira)氏であるが、同氏は2日間の全学術セッションに出席して質疑応答にも積極的に参加していた。会場の担当者によると、チラ氏がヴァイラ・ボッシュで開催される学術会議を傍聴することは少なくないが、すべてに出席するのは非常に珍しいとのこと、今回のラウンドテーブルの講演の質が高かったことを裏付けた。



会場内の様子(講演者は核融合科学研究所 山田教授)



“Discussion for the Future“で司会をする基礎生物学研究所岡田所長



本ラウンドテーブルドイツ側幹事役

ハイデルベルク大学 トーマス・ホルシュタイン教授



本ラウンドテーブルドイツ側幹事役

マックスプランク天文研究所 トーマス・ヘニング所長



クラウス・チラ氏

#### ④小平センター長による会議を傍聴しての所感

全体を通して参加者には他分野との関係を見渡す良い機会となり、参加者は十分な刺激と科学的養分を汲んで、「今後の国際共同研究・分野間融合研究や若手研究者の交流促進、また社会との連携に努力する」ことを共通認識として会議を終えた。会議後になって、参会者の多くから今回の企画につき「範囲が広く心配していたが、学術的・精神的に非常に贅沢な会議となって、多くを学び視野が豊かになった。今後の日独協働への意欲をそそる楽しい会であった」との趣旨の感想を頂いている。これも大学共同利用機関法人自然科学研究機構の積極的な取り組みと、ハイデルベルク側の歓迎意識の高まりの相乗効果の結果である。当センターとしては共催機関及び関係者に深く感謝するとともに、多忙の中、遠路参加された日本側研究者に感謝と敬意を表したい。

#### <関連 URL>

自然科学研究機構(NINS) HP [http://www.nins.jp/public\\_information/G\\_J\\_Round\\_Table.html](http://www.nins.jp/public_information/G_J_Round_Table.html)

ハイデルベルク大学 HP

<http://www.unitt.de/?context=493&&card=heises.bf011192151f264c5653dc76dc213c9c>

#### (4) ボン大学生命医科学研究所(LIMES)と早稲田大学との共同シンポジウムに出席

日時: 12月5日

場所: ボン大学生命医科学研究所(LIMES) (ボン市)

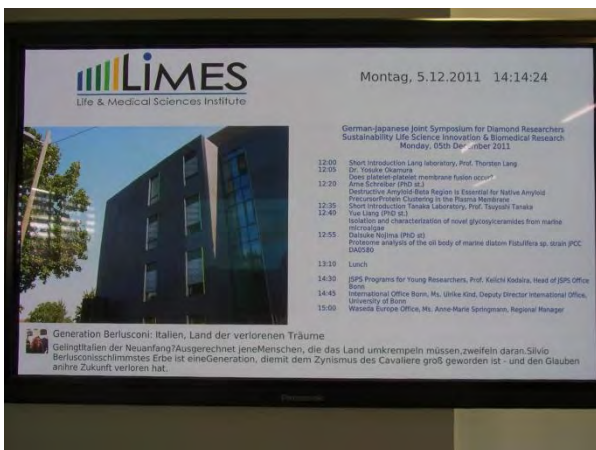
2011年12月5日(月)から6日(火)にかけて、早稲田大学から40数名の学生及び研究者がボン大学生命医科学研究所(Life & Medical Sciences Institute(LIMES))を訪問し、生命医科学分野における共同シンポジウムが開催された。このイベントは12月7日(水)に開催される「ボン大学における早稲田大学デー」(本四半期報告1-(6))とも関連しており、この共同シンポジウムの内容は、早稲田大学の学部生を含む学生及び若手研究者の研究紹介講演が中心であった。

当センターへは、LIMES所長のミヒヤエル・ホーホ(Michael Hoch)教授から小平センター長へ講演依頼があり、このシンポジウムにおいては小平センター長によるJSPS事業紹介講演も行われた。小平センター長の講演は昼食後すぐの時間に設けられ、主にドイツとの関係におけるJSPS事業の紹介を行った。講演に際しては、早稲田大学の朝日透教授より参加者に対して、今後の研究を進めていく上で、奨学金等の有用な情報を講演していただくから、ぜひ心して聞くように、との助言があり、学生たちも熱心に聞いていた。

小平センター長の講演後は、早稲田大学の研究室に所属する学生のプレゼンテーションが次々に行われた。学生等、多くの研究者の前で発表するのが初めてという発表者もあり、緊張しているといったコメントもあったが、プレゼンテーション資料は大変分かりやすく作成されており、堂々と発表している印象を受けた。

また、ボン大学国際部によるボン大学の紹介や、早稲田大学ヨーロッパセンター アンネマリー・シュプリングマン リージョナル・マネージャーによる同センターでの学生・研究者に対するフォロー、グローバル 30 事業の紹介、及び12月7日に開催される「早稲田デー」の宣伝なども行われた。

5日はLIMES主催による夕食会も開催された。ホーホ教授、朝日教授の開会挨拶、小平センター長による乾杯の挨拶により始まり、日独の学生や若手研究者同士の交流が和やかに進められた。



12月5日のプログラム



小平センター長による JSPS 事業紹介



ボン大学国際課による大学紹介



会場の様子

#### (5)大阪大学、神戸大学主催「日欧協働シンポジウム-教育・研究・交流:ブリュッセル 2011」に出席

日時: 12月6日

場所: Madou タワー (ベルギー ブリュッセル)

標記シンポジウムに小平センター長と中川副センター長が出席し、小平センター長が JSPS 事業紹介講演を行った。大阪大学は JSPS の若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP) などにより、欧州各国と若手研究者をはじめ、研究者、学生交流を行っているが、本シンポジウムは交流事

例を報告し、教育研究協力関係の情報を交換するために、ブリュッセルに事務所を有する神戸大学とともに開催したものである。

小平センター長は、JSPS のフェローシップや、「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」「大学の世界展開力強化事業」といった、研究者や学生の交流を促進するためのプログラムを中心に講演を行った。



小平センター長による JSPS 事業紹介



会場の様子

#### (6) ボン大学での早稲田大学主催日本への留学フェアに参加

日時: 12月7日

場所: ボン大学(ボン市)

ボン大学での“Dies Akademikus”(一般への学内開放日)に合わせて、早稲田大学主催、ボン大学共催の日本への留学フェアが開催された。ボン大学近くに所在する早稲田大学ヨーロッパセンターがグローバル30の海外大学共同利用事務所であることから、早稲田大学への留学を促進するだけではない「グローバル30日本留学説明会」と位置付けられ、グローバル30に採択されている13大学の内、早稲田大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、大阪大学、京都大学、九州大学、慶應義塾大学、上智大学、同志社大学、立命館大学の11大学が参加し、その他にも首都大学東京、桜美林大学が参加した。各大学は日本から教職員を派遣し、それぞれ情報ブースを出展し、いくつかの大学による模擬授業等も行われた。当センターにも早稲田大学から参加要請があり、中川副センター長、シュルツェ職員、坂本国際協力員が参加して情報ブースを出展し、中川副センター長が JSPS 事業紹介講演を行った。

ブースでの情報提供と並行して、講演形式での情報提供や模擬授業がブースの設置場所近くの教室で終日行われ、来場者は自分が興味のある講演や模擬授業を聞きに行くことができるようになっていた。講演会場となった教室では、はじめに在ドイツ日本国大使館の増子則義一等書記官が日本への留学についての概要説明をし、次に中川副センター長がフェローシップを中心とした JSPS 事業紹介をした。その後、ボン大学国際課による日本留学についての説明、ボン大学日本・韓国研究専攻のラインハ

ルト・ツェルナー教授による講演、筑波大学、京都大学、大阪大学、名古屋大学、早稲田大学による大学紹介及び模擬授業と続いた。

主催者の早稲田大学によると、来場者数は330人超であったとのことであった。JSPS 事業紹介講演には20名程度の来場者があり、講演や模擬授業によっては70名程度を収容する会場が満室になることもあり、主催者側が事前に有効な広報活動を行っていた印象を受けた。

一般への学内開放日であったこともあり、学生以外の一般来場者も多く、家族の日本留学に関する質問も少なくなかった。多くの大学が一堂に会してブースを出展していたことから、大学や履修課程に関する具体的な質問に対しても、来場者はface to faceで比較しながら情報を得ることができ、来場者の満足度は高かった印象を受けた。



中川副センター長による JSPS 事業紹介



JSPS のブース



場内の様子



場内で行われた学生サークルによる居合道の披露

## 2 2012年1月以降の予定

- 3月5日 JSPSブリッジフェローシップ審査会(於ボン)
- 5月11日(金) 第16回日独学術シンポジウム(於ミュンスター、～12日)
- 5月 JSPSサマープログラムプレオリテーション開催(於ボン)

### 3 対応機関幹部の交代

2011年12月31日をもって、16年にわたってドイツ学術交流会(DAAD)の副会長を務め、会長代行も務めていたマックス・フーバー(Max Huber)氏が退任し、後任としてギーセン大学長のジョイブラート・ムガジー(Joybrato Mukherjee)氏が2012年1月1日付けで副会長に就任しました。また、空席となっていた会長には、2012年1月1日付けで、ドイツ大学長会議会長のマルグレート・ヴァンターマンテル(Margret Wintermantel)氏が就任しました。

<関連 URL>

DAAD 東京事務 HP <http://tokyo.daad.de/wp/2011/12/ruecktritt-huber/>

### 4 センター長雑感

師走も半ば過ぎてから福島事故原発の冷却安定化と金正日総書記逝去の報を続けて聞く。しかし汚染除去作業・被災者救済事業は始まったばかり。天候不順による洪水、ユーロ危機と、天災・人災は依然として続いている。昨年末の雑感で記した期待とは大きく懸け離れた2011年だった。希望を捨てずに、腰を据えて、困難に立ち向かわなければならぬ。困難の多くが全地球規模の問題起源であるのに、現在の民主主義・民族主義を基本とする政治体制は極めて局所的な傾向に束縛されている。果たして2012年が「転換の始まりの年」になりうるのだろうか。理工系の学問だけでなく、人社系の学問の広がりや深まりの必要なことを痛切に感じる。日独修好150周年事業の締めくくりとして、12月はじめにハイデルベルクで基礎自然科学に関する日独ラウンドテーブルを開いた。成功裏に終えたものの、日程の制約もあって、哲学的な議論を十分に深められなかったのが心残りである。

小平桂一 2011.12.20

ぼんぼん時計第34号  
日本学術振興会ボン研究連絡センター  
JSPS Bonn Office  
Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)  
Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)  
Phone +49(0) 228-375050 Fax +49(0) 228-957777  
www.jsp-bonn.de